

「ている」形の解釈と動作主性について

| | |
|----------|---|
| 著者 | 杉本 武 |
| 雑誌名 | 文藝言語研究. 言語篇 |
| 巻 | 42 |
| ページ | 37-50 |
| 発行年 | 2002-10-30 |
| その他のタイトル | On the Interpretation of Te-iru forms and Agentivity in Japanese |
| URL | http://hdl.handle.net/2241/9780 |

「ている」形の解釈と動作主性について

杉 本 武

1. はじめに
2. 瞬間性から変化性へ、そして非対格性へ
3. 受動文と「ている」形
4. 非動作主主語の他動詞文
5. 結果相と経験相
6. おわりに

1. はじめに

日本語のアスペクト形式「ている」は、接統する動詞のタイプにより、進行相の解釈を受ける場合と、結果相の解釈を受ける場合があるとされる⁽¹⁾。

(1) 太郎が桜の木を倒している。(進行相)

(2) 桜の木が倒れている。(結果相)

この動詞のタイプをどのような特徴によって捉えるかということは、日本語のアスペクト研究が本格的に行われた初期より問題にされてきている。2.で概観するように、当初、このタイプは、継続動詞と瞬間動詞の対立として捉えられ、次いで、動作動詞と変化動詞の対立として捉え直された。また、近年は、非対格仮説⁽²⁾の観点から説明しようとする研究もある。

また、進行相の解釈を受ける他動詞であっても、それが受動文になった場合、結果相の解釈を受けることがあることが指摘されている。

(3)a. 太郎が塀を壊している。(進行相)

b. 塀が壊されている。(結果相)

しかしながら、次のように受動文の動作主が顕在する場合は、進行相の解釈を受けるようになる。

(4) 塀が太郎によって壊されている。(進行相)

本稿では、受動文における「ている」形の振る舞いなどを見ながら、「ている」形の解釈と動作主の関係について考察して行く。さらに、これをもとに、経験相の取り扱いについても検討を加えたい。

2. 瞬間性から変化性へ、そして非対格性へ

「ている」形の表すアスペクトの実現に関しては、古くは、松下(1930=1978)による記述がある。松下(1930=1978)においては、動作を瞬間性の動作と継続性の動作とに分け、次のように述べている。

瞬間性の動作は一点の如く見られるから「居る」を附けると動作が全部行はれた後を表す。これが全已然である。継続性の動作は線の如く見られるから「居る」が附くと今までの動作だけは済んだがまだ後が有ることになる。十分間の動作が五分間だけ済んで後の五分間は引き続き行はれることになる。これが半已然即ち進行態である。(松下(1930=1978:411))

これを引き継ぎながら、金田一(1950=1976:7 ff.)は、動詞を次の4種に分類する。

状態動詞:「ている」を付けることができないもの

継続動詞:「ている」を付けると「動作が進行中である」ことを表すもの

瞬間動詞:「ている」を付けると「その動作・作用が終ってその結果が残存している」ことを表すもの

第四種の動詞:「ている」を付けない形が用いられず、「～ている」の形で状態を表わすもの

このように、「ている」形が進行相と結果相のいずれの解釈を受けるかという点に関しては、まず、動詞が継続動詞か瞬間動詞かという分類に基づいてなされたのである。これに対して、奥田(1978a, b)において、金田一(1950=1976)を中心としたアスペクト研究の、記述的、理論的問題点が指摘され、「ている」形の表すアスペクトに関わる特徴として、継続動詞か瞬間動詞ではなく、「変化動詞」か「非変化動詞」という分類が取り上げられることになる⁽³⁾。その後、この立場は、工藤(1982)などに引き継がれていくことになる。工藤(1995)は、従来の状態動詞と非状態動詞(動作動詞)の2分類に対して、まず動詞を次の三つのものに分類する。

(A) 外的運動動詞——開ける、切る、殺す、食べる、見る、読む、たた

く、歩く、遊ぶ、動く、座る、行く、死ぬ、枯れる、曇る、結婚する

(B) 内的情態動詞——思う、考える、信じる、望む、心配する、感動する、苦しむ、驚く、あきれる、感じる、見える、痛む、疲れる

(C) 静態動詞——ある、いる、値する、甘すぎる／存在する、異なる、意味する／優れている、精通している、そばえている、面している

(工藤 (1995:69))

このうち、(B)は、(A)にも(C)にも所属させにくい動詞であり、「する」対「している」の典型的なアスペクト対立は、(A)のグループにおいて成立するとされ、(A)は、さらに次のように3分類される。

(A・1) 主体動作・客体変化動詞——開ける、折る、消す、倒す、曲げる、入れる、並べる、抜く、出す、運ぶ、作る

(A・2) 主体変化動詞——行く、来る、帰る、立つ、並ぶ、開く、折れる、消える、曲がる、入る、出る、太る、就職する

(A・3) 主体動作動詞——動かす、回す、打つ、蹴る、押す、食べる、見る、言う、歩く、泳ぐ、走る、泣く、飛ぶ、揺れる

(工藤 (1995:71f.))

そして、それぞれのグループは「～ている」の形で、次のようなアスペクトを表すとする。

- | | |
|--------------|-----------------------|
| ・主体動作・客体変化動詞 | 動作継続 (能動) / 結果継続 (受動) |
| ・主体変化動詞 | 結果継続 |
| ・主体動作動詞 | 動作継続 (能動・受動) |

(工藤 (1995:72))

さらに、工藤 (1982) では、次のような現象についてもふれられている⁴⁾。主体動作・客体変化動詞の場合、通常、進行相 (工藤 (1982) では「主体の動きの継続」) を表すが、次のような場合は、結果相 (工藤 (1982) では「客体の変化の結果の継続」) を表すとされる。

- しかし、次のように、主語がなく意志的動作主体が問題とならない場合 (i)、及び主語があっても意志的動作主体を表わしていない場合 (ii) (iii) には、「客体の変化の結果の継続」を表わすようになる。

(工藤 (1982:59))

工藤 (1982:59f.) からいくつか例を挙げる。

(5) 昨日、行ったけれど雨戸を閉めていましたよ。(海と毒薬)

(6) ——なんだかガスが臭うような気がして、徹さんがストーブひっくり返してるんじゃないかと心配で、見にいっていたんですよ。(亜紀子)

(7) 消防車が出かける頃には、沼津は町中飛火で、火焰が空を染めていた。(人間の運命)

(8) 宮本さんの蔵書の一部も教員室の中を飾っていた。(桜の実の熟するとき)

(9) そこには乗客が列をつくっていた。(僕たちの失敗)

(5)は(i)の「意志的動作主体を表わす主語が欠落している場合」、(6)は(ii)の「主語が意志的動作主体を表わしていない場合」、(7)～(9)は(iii)の「主語が意志的動作主体を表わしていず、基本的に無生(inanimate)であって、原因、手段、材料を表わしている場合」である。

また、竹沢(1991)は、生成文法の立場から、受動文、非対格自動詞、分離不可能所有構文などの現象を検討し、次のような仮説を提案し、構造的な特徴から「ている」形の結果相解釈を説明しようとしている。

「ている」の結果相解釈は、主語と影響動詞の内在項(internal argument)の間に束縛関係がある場合に得られる(竹沢(1991:70))

これは、次のような現象に基づいている(例文は、竹沢(1991)による)。

(10)a. 山田さんがおもちゃをこわしている。

b. おもちゃがこわされている。

(11) 山田さんが踊っている。

まず、(10)は、能動文と受動文の対であるが、受動文の場合、目的語の痕跡は主語「おもちゃ」によって束縛される。この結果、先の仮説から結果相解釈が生じるとされる。また、(11)は、非能格構文の場合で、この場合、主語「山田さん」は外項であり、目的語を束縛しない。この結果、結果相解釈が生じないとされる。これに対して、次のような非対格構文の場合、主語「皿」は内項が主語に移動したものであり、このため、主語が目的語を束縛し、結果相解釈が生じる。

(12) 皿が割れている。

一方、次のような他動詞構文の場合、主語が目的語を束縛しないため、結果相解釈が生じない。

(13) 太郎が皿を割っている。

また、竹沢 (1991:68) は、次のような文を「分離不可能所有」構文と呼んでいる。

(14)a. 山田さんが自分の髪を染めている。

b. 山田さんが田中さんの髪を染めている。

(14a)の場合、主語「山田さん」と目的語「自分の髪」の間に全体・部分の関係があり、全体は部分を束縛すると仮定している。このため、(14a)は結果相解釈を受けるとされる。一方、(14b)の場合、主語「山田さん」と目的語「田中さんの髪」の間に全体・部分の関係がなく、束縛関係にないため、結果相解釈を受けないとされる。

さらに、竹沢 (1991:69f.) では、「着る」のような動詞の結果相解釈を説明するために、着点を表す「に句」の存在を仮定する。

(15) 山田さんがセーターを着ている。

この場合、音声形を持たない、「からだに」のような「に句」が存在し、主語とこれに「全体・部分」の関係があり、束縛関係にあるとする。

このような、受動文、自動詞と他動詞の問題は、奥田 (1978b) をはじめ、従来、しばしば言及されてきたものであるが、竹沢 (1991) は、これを形式的に捉えたものであると考えられる。

3. 受動文と「ている」形

従来、「ている」形が結果相の解釈を受けるのが、変化動詞の中でも、なぜ主体変化動詞に限られるのかという点については、十分な説明が与えられていなかったように思われる。従来の説明では、主体動作・客体変化動詞の場合、あくまでも主体動作に重点が置かれるため、結果相の解釈を受けないというように考えられるであろう。しかし、主体動作・客体変化動詞は、結果副詞をとることによって、客体変化に重点を置き、結果相の解釈を受けてもよさそうであるが、実際にはそのようなことはなく、結果相の解釈を受けることがない。

(16) 太郎は花瓶を粉々に壊している。

これは、竹沢 (1991) の仮説であれば、結果副詞をとっても、束縛関係は変わらず、結果相の解釈を受けないことになる。

一方、結果相の「ている」形は、対象の状態を示すものであり、形容詞文との平行関係から、状態の対象は主語に限られるという説明が可能であるかもし

れない。しかし、これは、次節で述べるように、結果相は主語の状態を叙述する場合に限られないため、妥当ではない。

それでは、このような問題を説明できることから、竹沢（1991）の仮説で十分であるかと言うと、説明できない現象も存在する。竹沢（1991）では、受動文の場合、主語と目的語が束縛関係にあるため、結果相の解釈を受けるとされるが、次の受動文の場合、結果相の解釈をしにくい。

- (17) 建物が暴徒に破壊されている。

これは、次の文と対照的である。

- (18) 建物が破壊されている。

ところが、両文で主語と目的語の束縛関係に違いがあるとは考えられないのである。また、結果相の解釈を受けるのは、主体変化動詞文に限られるという記述も成り立たなくなる。ここで、両文にどのような違いがあるかと言うと、それは動作主が存在するか否かということである。類例を挙げる。

- (19)a. 外堀が徳川軍に埋められている。

- b. 外堀が埋められている。

- (20)a. 人質が強盗に縛られている。

- b. 人質が縛られている。

- (21)a. 生徒が先生によって校庭に集められている。

- b. 生徒が校庭に集められている。

b. では結果相の解釈が許されるが、a. では結果相の解釈が許されないか、しにくい。

このような現象は、細川（1986:123ff.）でも状態受身と動作受身という観点から指摘されているが、細川（1986）は、動作主が「に」で表示された場合と「によって」で表示された場合とでは違いがあり、動作受身の場合は「に」が使われ、状態受身の場合は「によって」が好まれるとしている。しかしながら、(21a)のように、「によって」で動作主が表示された場合であっても、結果相の解釈がしにくいようである。ただし、この判断は微妙で、次の(22a)の場合、進行相よりも結果相の解釈がしやすいかもしれない。

- (22)a. あの町は侵略軍によって破壊されている。

- b. あの町は侵略軍に破壊されている。

ただし、(22a)と次の文を参照されたい。

- (23) あの町は3年前に侵略軍によって破壊されている。

この場合、「3年前」という過去を示す副詞と共に起しているため、結果相では

なく経験相と考えられる¹⁵⁾。(22a)の意味は、この文の意味に近いようにも感じられるため、結果相ではない可能性もある。

これは、砂川(1984)などで指摘されているように、「に」で表示されたものよりも、「によって」で表示されたものの方が、動作主としての位置づけが低いことが関係しているのではないかと考えられる¹⁶⁾。これについては、文の判定も微妙であることもあり、本稿では open question としておきたい。

4. 非動作主主語の他動詞文

前節でみたような現象から、受動文の「ている」形の結果相解釈については、主語と目的語の束縛関係よりも、動作主の不在が関係しているように思われる。そこで、次のような仮説をたててみよう。

・「ている」形の結果相解釈

変化動詞文において動作主が存在しない場合、結果相解釈が許される。以下、これを「動作主不在仮説」と呼ぶことにする。

これに関して興味深いのは、2.でも紹介した、上藤(1982)の指摘である。上藤(1982:59)によると、意志的動作主体が存在しない場合や主語が意志的動作主体を表していない場合に「ている」形が結果相を表すようになる。例えば、次の a. の場合、無生物が主語になっており、動作主ではなく、原因、手段であると考えられる。なお、対比のため、b. に原因、手段をデ格で示した受動文を挙げている。

- (24) a. 地割れが村を分断している。
b. 地割れで村が分断されている。
- (25) a. 倒れたクレーンが家を押し潰している。
b. 倒れたクレーンで家が押し潰されている。
- (26) a. 雪が車を覆っている。
b. 雪で車が覆われている。

これらの b. では、変化の対象が主語になっており、「ている」形は結果相の解釈を受ける。一方、a. は変化の対象が主語ではなく、目的語になっているが、b. と同様の意味を表し、「ている」形は結果相の解釈を受けると考えられる。

これらの文を、次の主語が動作主となっている文と比較されたい。

- (27) 機動隊が群衆を分断している。
- (28) 巨人が家を押し潰している。

(29) 太郎が車を(シートで)覆っている。

これらの場合は、同じ動詞であっても、先の例とは対照的に進行相の解釈を受ける。

(24a) (25a) (26a)は、動作主が存在しないことから、動作主不在仮説によって説明可能であり、この仮説は妥当であるように思われる。また、これらの文では、主語の状態を叙述するわけではない。それぞれ、目的語である「村」「家」「車」の状態を叙述していることになる。したがって、多くの場合はそうであるものの、結果相の解釈を受けるのが主体変化動詞文に限られるという記述は正確ではないことになる。同時に、なぜ、結果相の解釈を受けるのが、変化動詞文の一部であるのかということも、主語の状態を叙述するものであるからであるとは言えなくなる。

なお、反例とみられるような文も存在する。

(30)a. 雷が地面をえぐっている。

b. 雷で地面がえぐられている。

この場合、a. は結果相の解釈を受けにくいようであり、「雷」のような自然現象は動作主的に解釈されやすいのかもしれない。あるいは、「雷」と「地面がえぐられた」状態とが、原因と結果の関係にあると認識しやすいかどうかという、言語外の要因も関わってくるのかもしれない。本稿では、その可能性を指摘するにとどめたい。

また、次のような再帰動詞に見られる現象も同様のものではないかと考えられる。

(31)a. 太郎が水を浴びている。

b. 犯人が返り血を浴びている。

どちらも、主語は状態変化を受けると考えられるが、a. は進行相の解釈を受けるのに対して、b. は結果相の解釈を受ける。ここで、違いは、「水を浴びる」場合、通常、動作は意図的であり、主語は動作主であるが、「返り血を浴びる」場合、意図的ではなく、主語は経験者であると考えられるという点である。つまり、b. の場合、主語が動作主ではないので、動作主不在仮説から結果相の解釈が許されると考えられるのである。

ところが、同じ再帰動詞でも、「着る」「脱ぐ」の場合は、主語が動作主であるにもかかわらず、進行相の解釈とともに結果相の解釈も許す。

(32) 花子が着物を着ている。

(33) 太郎が靴を脱いでいる。

これは、このような動詞の場合、主語がその動作を行っても、他者が行ってもよいということが関係しているのかもしれない。

さて、動作主不在仮説によると、2.で取り上げた、竹沢（1991）の「分離不可能所有」構文も別な説明が可能になる。例えば、次の文を見てみよう（例文は竹沢（1991:68）による）。

(34) 山田さんが足を痛めている。

(35) 山田さんが腕を折っている。

これらの文は、結果相の解釈を受けるが、主語「山田さん」は動作主ではなく、経験者である。このような文は、天野（1987）が「経験者主体の他動詞文」と呼んでいるもので、主語が経験者として機能する。したがって、主語が動作主ではないため、「ている」形が結果相の解釈を受けると考えられるのである。

それでは、なぜ、「ている」形が結果相の解釈を受けるためには、動作主が存在しないという条件が必要なのだろうか。杉本（1988）でも述べたように、進行相の「ている」形が動作性を残しているのに対して、結果相の「ている」形は完全に状態的である。このことから、結果相の「ている」形は、過去の出来事と現在の「状態」を関連づける、状態化形式であると言える。状態化形式である以上、進行相の「ている」形と異なり、結果相の「ている」形は動作主と共存し得ないのである。

従来、「ている」形が結果相の解釈を受けるのは、主語が変化の対象である場合である（つまり、主体変化動詞文）とされていた。しかしながら、以上のことから明かなように、変化の対象が主語であることが重要なのではなく、動作主が存在しないということが重要なのである。受動文の場合を除き、動作主が存在する場合は、常にそれが主語となる。結果的に変化の対象は非主語（目的語）になり、主体変化動詞文にはならないのである。

このように考えると、「ている」形が結果相の解釈を受けるのが、主体変化動詞文の場合、主語が非動作主である客体変化動詞文の場合、動作主が存在しない受動文の場合であるということが、統一的に説明できる。また、従来、(34) (35)のような文も、目的語の状態変化の結果、主語も状態変化するため、結果相の解釈を受けるとされるが、これも、動作主が存在しないということから統一的に説明することができるのである。

5. 結果相と経験相

天野 (1987: (2)f.) は、経験者主体の他動詞文の中でも、次の文のような、主体が動作・出来事の引き起こし手でないものを「状態変化主体の他動詞文」と呼んでいる。

(36) 私たちは、空襲で家財道具をみんな焼いてしまった。

(37) 気の毒にも、田中さんは昨日の台風で屋根を飛ばしたそうだ。
これらの文は、次のように、「ている」形にしても進行相の解釈を受けない。

(38) 私たちは、空襲で家財道具をみんな焼いている。

(39)a. 気の毒にも、田中さんは昨日の台風で屋根を飛ばしている。

b. 田中さんは台風で屋根を飛ばしている。

これらの文は、むしろ経験相の解釈を受ける。したがって、過去を示す副詞とル形が共起することができる (cf. 杉本 (1988))。

(40) 私たちは、10年前に空襲で家財道具をみんな焼いている。

(41) 田中さんは1年前に台風で屋根を飛ばしている。

同様に、主体が動作・出来事の引き起こし手であっても、意図的でない場合は、経験相の解釈を受ける。

(42)a. 太郎が窓を割っている。 (意図的)

b. 太郎が、うっかりして、窓を割っている。 (非意図的)

(43)a. 花子は煙草の灰を灰皿に落としている。 (意図的)

b. 花子は、知らないうちに、煙草の灰をスカートに落としている。

(非意図的)

ただし、この場合、進行相の解釈ができないことはないようであり、先の状態変化主体の他動詞文とは違いがあるようである。これは、主語が引き落とし手であるかどうかによるものであると考えられる。

また、使役文の中には、「経験の使役文」と呼ばれるものがある (cf. 井上 (1976: 63ff.)). 例文も井上 (1976: 65) による)。

(44) 彼は子供を死なせた。

(45) 花子は赤ん坊を流感にかからせた。

このような使役文では、主語が動作主ではなく経験者であると考えられる。

(46) 彼は子供を死なせている。

(47) 花子は赤ん坊を流感にかからせている。

この場合、「ている」形は進行相の解釈を受けず、経験相の解釈を受ける。も

ちろん、この文自体は進行相の解釈をすることも可能ではあるが、その場合、主語が動作主であるような状況が想定され、経験の使役文ではないと考えられる。

さらに、次のような文を考えてみたい。

(48) 太郎は UFO を目撃している。

これは、藤井 (1966=1976)、吉川 (1971=1976) など、「瞬間動詞の非結果動詞」とされるもので、動作動詞であるにもかかわらず、「ている」形が進行相の解釈を受けず、経験相の解釈を受ける。しかし、「今」のような副詞を共起させると、進行相の解釈も可能になる。

(49) 太郎は、今、UFO が飛来するのを目撃している。

ここで注目されるのは、(49)の場合、「目撃する」が「見る」と同じような意味になり、意図性が感じられることである。したがって、(48)の主語は動作主ではなく、経験者であると考えられるが、(49)の場合、動作主なのではないかと考えられる。

以上の現象は、経験相の解釈にも動作主の不在が関わっていることを示している。ただし、これには、通常経験相の用例が問題になる。

(50) この画家はたくさんの自画像を描いている。

(51) 太郎は10年前にアメリカに留学している。

この場合、主語はその行為をあくまでも意図的に行ったわけであるので、主語は動作主と考えざるを得ない。しかし、これらの文の場合、これまでの用例とは異なり、「たくさんの」「10年前に」などの表現、あるいはコンテキストの助けを借りないと経験相の解釈がしにくい。

(52) この画家は自画像を描いている。

(53) 太郎はアメリカに留学している。

このように、特定の表現、コンテキストの助けがない場合は、進行相の解釈を受ける。このことから、経験相の解釈が許されるのは、動作主が存在しないか、副詞、コンテキスト等の助けがある場合と考えられるかもしれない。これについては、今後の検討を要する。

さて、以上のようにみえてくると、このような構文にも、動作主不在仮説が成り立つのではないかと考えられる。従来、経験相は、結果相の派生的用法と考えられている (T.藤 (1982) など)。また、藤井 (1966=1976) は、結果相と経験相について、「この「書いている」と「結婚している」の意味は異質のものであると思う (p.105)」としている。一方、杉本 (1988) では、「結果相は出

来事時から基準時までの間の時間的幅を視野とし、経験相はその視野が出来事時にシフトしたもの (p. 113)」とし、その類縁性を認めた。先のような現象は、逆に、結果相と経験相の類縁性を示しているものではないかと考えられる。

6. おわりに

本稿では、「テイル」形の結果相解釈が許されるのは、動作主が存在しない場合であること示した。このことは逆に言うと、結果相の「ている」形は、文を「脱動作主化」と言うこともできる。このような脱動作主化ということ仮定すると、次のような現象を説明することができる。

(54)a. 子供が枝にぶらさがった。

b. *カバンが枝にぶらさがった。

(54b)は、次の文と対照的に非文である。

(55) カバンが枝にひっかかった。

(54a)のような文、あるいは次のような文から、「ぶらさがる」の主語は動作主であると考えられる。

(56) 子供が枝にぶらさがろうとした。

このため、無生物主語である(54b)は不自然になる。ところが、(54b)も、次のように「ている」形にすると自然になる。

(57) カバンが枝にぶらさがっている。

この場合、「ている」形が結果相解釈を受けるために脱動作主化され、「カバン」のような無生物主語を許すようになるのではないかと考えられる。

しかしながら、動作主不在仮説の反例ともみられるような例も存在するため、このような例をどのように考えるのかは検討を要する。また、逆に、進行相の解釈に動作主の存在が必要であるわけではないので、結果相と進行相の関係をどのように捉えるのかということも、考えなければならない。今後の課題としたい。

注

- (1) これらのアスペクトを示す用語は研究者によって様々であるが、本稿では「進行相」「結果相」の用語を用いる。また、「ている」形が進行相（あるいは結果相）の「解釈を受ける」という表現を用いるが、これは便宜的なものである。杉本（1988）でも論じたように、進行相の「ている」と結果相の「ている」はかなり異なった性質を持つため、別の形式であると考えられる。

- (2) 非対格仮説のみでは捉えきれないが、ここでは **cover term** として用いる。
 (3) 研究者によって、「変化動詞」の代わりに「結果動詞」という用語を使う場合もあるが、本稿では、引用中を除き、「変化動詞」という用語を用いることにする。
 (4) ただし、工藤 (1995) では、このような現象についてはふれられていない。
 (5) 経験相については、杉本 (1988) も参照されたい。

なお、工藤 (1982) が指摘するように、「経験相」という用語が適当かどうかは問題があるが、本稿では、このようなアスペクトを「経験相」と呼ぶことにする。

なお、これまでの「経験」という規定の仕方は、「私は前に一度結婚している」の場合はよいが、「彼は二年前に死んでいる」場合は不適當であるばかりでなく、記録の用法をも包括することができない。従って、本稿では「現在有効な、過去の運動の実現」と規定しなおした。(工藤 (1982:80f.))

- (6) 砂川 (1984) では、次のように述べられている。

すなわち、補文の中の名詞と動詞が「動作のよりどころ—動作」という関係を成り立たせてさえいれば、その関係が直接的であるか間接的であるかにかかわりなく、「によって受身文」を作ることができる。それに対して「に受身文」の方は、補文の中の名詞と動詞が「動作主—動作」という直接的な関係で結ばれている場合でなければ成立しない。(砂川 (1984:83))

参考文献

- 天野みどり (1987) 「状態変化主体の他動詞文」, 『国語学』 151, pp. 110-97
 石田尊 (1999) 「行為者解釈を持たない主語について」, 『筑波日本語研究』 4, pp. 16-41, 筑波大学
 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語 (上)』, 大修館書店
 奥田靖雄 (1978a) 「アスペクトの研究をめぐって (上)」, 『教育国語』 53, pp. 33-44
 奥田靖雄 (1978b) 「アスペクトの研究をめぐって (下)」, 『教育国語』 54, pp. 14-27
 金田一春彦 (1950=1976) 「国語動詞の一分類」, 金田一春彦 (編) (1976), pp. 5-26
 金田一春彦 (1955=1976) 「日本語動詞のテンスとアスペクト」, 金田一春彦 (編) (1976), pp. 27-61
 金田一春彦 (編) (1976) 『日本語動詞のアスペクト』, むぎ書房
 工藤真由美 (1982) 「シテイル形式の意味記述」, 『武蔵大学人文学会雑誌』 13: 4, pp. 51-88, 武蔵大学
 工藤真由美 (1987) 「現代日本語のアスペクトについて」, 『教育国語』 91, pp. 2-21
 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現——』, ひつじ書房
 杉本武 (1988) 「動詞+テイル」の表すアスペクトについて」, 『論集 ことば』 刊行

- 会（編）『論集 ことば』, pp. 101-115, 『論集 ことば』刊行会（くろしお出版）
- 砂川有里子（1984）「〈に受身文〉と〈によって受身文〉」, 『日本語学』 3:7, pp. 76-87
- 高橋太郎（1985）『現代日本語のアスペクトとテンス』（国立国語研究所報告82）, 秀英出版
- 竹沢幸一（1991）「受動文, 能格文, 分離不可能所有構文と「ている」の解釈」, 仁田義雄（編）『日本語のヴォイスと他動性』, pp. 59-81, くろしお出版
- 藤井正（1966=1976）「「動詞+ている」の意味」, 金田一春彦（編）（1976）, pp. 97-116
- 松下大三郎（1930=1978）『改撰標準日本文法』, 勉誠社
- 吉川武時（1971=1976）「現代日本語動詞のアスペクトの研究」, 金田一春彦（編）（1976）, pp. 155-327